

論文タイトル： Trends of average intake of macronutrients in 47 prefectures of Japan from 1975 to 1994--possible factors that may bias the trend data.

論文著者： Yoshiike N, 他

論文掲載誌： Journal of Epidemiology. 8: 160-167.

この研究では、昭和 45 年(1975 年)から平成 6 年(1994 年)に厚生労働省が実施した「国民栄養調査」に参加した全国の 1 歳以上の男女の食事摂取量のデータを用いて、47 都道府県別に総エネルギー摂取量と栄養素摂取量の年次推移を記述しています。1994 年までの国民栄養調査では、世帯別食事調査を行ったため、個々人の年齢や性別の違いを考慮できていませんでした。

食事記録から、都道府県別一人あたりの総エネルギー摂取量(／日)および栄養素摂取量(／日)を算出し、年齢別人口構成割合(1-4 歳・5-9・10-19・65 歳以上の人口割合)と、栄養素摂取量の平均値との関連を検討しました。また、都道府県の年齢別人口構成割合の変化が、栄養素摂取量の年次推移に与える影響を調べました。

年齢別人口構成割合(1-4 歳・5-9・10-19・65 歳以上の人口割合)および男女の割合と、エネルギー・炭水化物・脂質・たんぱく質の摂取量との関連を検討した結果、65 歳以上の高齢者の人口割合が高いほど、脂質摂取量が減少し、炭水化物摂取量が増加していました。対照的に、5-9 歳の人口割合が高いほど、脂質摂取量が増加し、炭水化物摂取量が減少したことが示されました。

また、1-4 歳の人口割合、5-9 歳の人口割合、10-19 歳の人口割合、65 歳以上の人口割合は互いに影響しあう因子であるため、それらの影響を取り除いて、年齢別人口構成割合と栄養素摂取量との関連を検討した結果、1-4 歳の人口割合、5-9 歳の人口割合、10-19 歳の人口割合、65 歳以上の人口割合が 1%増加すると、総エネルギー摂取量は、それぞれ、-5.88、-1.72、+2.27、-1.45kcal 変化することが明らかになりました。また、65 歳以上の人口割合が 1%増加すると、たんぱく質摂取量、脂質摂取量はそれぞれ、-0.298、+0.481g 変化することが示されました。

さらに、上記の解析を都道府県ごとに行った結果、人口構成割合の年次変化を考慮しなかった場合と比較して、総エネルギー摂取量および炭水化物摂取量が統計学的に有意に減少するという結果になった都道府県の数が少なくなりました。一方、脂質摂取量が増加するという結果になった都道府県の数が多くなりました。これらの結果から、都道府県の年齢別人口構成割合の年次変化の影響を考慮せずに栄養素摂取量の年次推移を検討した場合、総エネルギー摂取量と炭水化物摂取量は、実際の減少よりも過大に評価され、脂質摂取量は、実際の増加よりも過少に評価される傾向にあることが明らかになりました。

※詳細は、文献をご確認ください。
—国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所—